

初潮と月経に関する研究（その2）

—— 初潮教育 ——

森 田 道 子

Studies on the Menarche and Menstruation (Part 2)

—— Menarche Instruction ——

Michiko MORITA

（昭和42年11月18日受理）

1. はじめに

母性保健のための配慮は胎生期から始めなければならない。特に母性機能が具体的にあらわれはじめる思春期の保健は将来の母性機能に重大な影響を及ぼすものであり、家庭、社会、国家の福祉を期待する母性機能を完全に発揮させるためには思春期の保健教育の充実が重要である。

思春期は人生の大きな転換期であり、心身ともに最大の不安定な時期でもある。この時期にはじめて経験する初潮について準備教育を行なうことは健全な母性の育成のために果す役割は大きいので、特に高知県の小中学校における初潮教育の実態について基礎的調査をおこなったのでここに報告する。

2. 調査対象および方法

(1) 対 象

- 1) 高知市立城西中学校二年生女子 100名とその家庭
- 2) 高知県下の小中学校50校

(2) 時 期

昭和43年9月～10月

(3) 方 法

質問紙法

3. 調査内容

- (1) 高知市立城西中学校二年生の初潮と月経の実態
- (2) 高知県の小中学校における初潮教育の現状

4. 調査成績と考察

(1) 高知市立城西中学校二年生の初潮と月経の実態

PTA成人学級の学習テーマとして「思春期の中学生を中心とした学校と家庭のあり方」などをとりあげ、また第12回中四国学校保健大会で「性教育」について発表の業績をもち熱心に思春期問題に取り組んでおられる高知市立城西中学校の協力を得て同校二年生の女子125名のうち100名を無作為に抽出して質問紙法による調査をおこなった。

1) 生徒の環境

生活環境が初潮やその後の月経に影響をおよぼすことは周知の通りであり重要な問題である。

高知市立城西中学校は、旧高知市の市街地の中心にある高知城を境に、西部にあたる地域で、旭

東, 第四, 第六小学校などを校下にもつ生徒総数 754 名の中学校であり, 生徒の通学時間は片道, 徒歩または自転車などで10分以内のものが20名で, 11分~20分のものが54名, それ以上30分までのものが26名であり, 通学のための負担は多いとは思われない。

第1表 父 母 の 職 業

職業	公務員	会社員	商業	農林業	教員	自営	銀行員	弁護士	運転手	工員	大左工官	宗教家	その他	無職	不在	計
父	13	20	12	4	3	13	3	1	6	3	5	1	2	0	12	100
母	3	14	15	3						8			5	48	4	100

父母の職業については第1表の通りであり, 相対的にあまり高い水準の家庭とは思われない。仔細については後に述べる。

住居については持家が最も多く45名で, 次で借家が38名でアパートが8名, 官舎が3名で社宅が2名, その他が2名であった。

家庭での休養については十分にとれるものが23名, 普通にとれるものが68名, とれないと答えたものが3名であり, その他に記載されていないものが6名であった。

睡眠時間については下記の通りである。

睡眠時間	人数	百分率	睡眠時間	人数	百分率	睡眠時間	人数	百分率
5.01~5.30	1名	1%	7.01~7.30	10名	10%	9.01~9.30	8名	8%
5.31~6.00	2名	2%	7.31~8.00	28名	28%	9.31~10.00	3名	3%
6.01~6.30	2名	2%	8.01~8.30	23名	23%	計	100名	100%
6.31~7.00	7名	7%	8.31~9.00	16名	16%			

多くのものが8時間を中心とする適当な睡眠をとっているが中にはごくわずかではあるが極度に睡眠の少ない生徒もあり問題を感じるので仔細については後に述べる。

次に学校教育活動の一環であるクラブ活動については75名のものが何らかのクラブに所属し, そのうちの約半数の37名はスポーツのクラブに参加して週に4日~6日放課後の練習を約2時間している。他の38名は文化部的なクラブに参加して週に2日~3日で一回約1時間~2時間である。

そして最近問題になるのは学校以外での勉強時間であるが, その調査結果は下記の通りである。

学校以外での勉強時間

勉強時間	人数	百分率	勉強時間	人数	百分率	勉強時間	人数	百分率
0	1名	1%	2.00	32名	32%	4.00	3名	3%
0.30	3名	3%	2.30	7名	7%	記載なし	5名	5%
1.00	14名	14%	3.00	8名	8%	計	100名	100%
1.30	25名	25%	3.30	2名	2%			

多くのものが2時間~3時間程度で特に1時間~2時間のものが71%であり, 思春期の健康に影響をおよぼすものとは考えられない。

生活環境については以上であるが, 母性保健の見地より, 思春期の健康管理上大体において望ましい生活環境であると考え。特にこの調査結果問題となったのは家庭で休養のとれないと答えた3名であり, aはクラブには参加していないが母子家庭であり, 花屋を家業としていて, 就床が12時で起床が6時30分であり, 家業若しくは家事の負担がかなりあるのではないかと推察される。bについては家業は建材店で, 父の年齢は35才で母親がなく, 祖母が母親がわりをしており, 感じやすい年代でもあるのでいろいろと家庭的な悩みもあるのではなかろうかと推察する。そしてこの生徒はバレー部に所属しているが, 睡眠時間は十分であるが就床が11時30分で起床が7時30分で夜ふ

かし形であり、運動部員としても健康管理上問題を感じる。cについては学校以外での勉強時間が0であり、遊ぶ時間が7時間もあり、それにクラブは陸上部に参加し、就床が1時で起床が7時40分である。これらのことを考えても家庭との連携のもとに思春期の生活指導についても細かい配慮が必要であることを痛感する。

2) 初潮年令および発来季節

初潮年令や発来季節は劇的なことだけに初潮の発来している93名は全員明確に記入しており、多くのものが11才～13才にかけて初潮をみており、12才代では約半数の47名、11才代では23名であり、13才代では22名であり、それ以後が1名で現在まだ初潮のないものが7名であり、現在までに発来している93名について仮に平均年令を算出すれば12才6か月である。

第2表 初潮の発来月

月別 学年別		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	未発来者	計
小学校	5			1				1		1					3
	6	6	1	1	4	10	5	1	3	2	4	1	1		39
中学校	1	10	2	2		7	3	1	1	7	4	1	1		39
	2	2	2		2	3	3							(7)	12 (7)
合 計		18	5	4	6	20	11	3	4	10	8	2	2	(7)	93 (7)

初潮と季節との関係については第2表に示すように8月が最も多く、次いで4月であり休暇のある月が多いことを考えると心理的なファクターが大きく働いていると思われるので興味深い傾向であり、このことは指導者や、保護者への参考となることと思う。

3) 初潮前の月経についての知識と、初潮時の情緒反応

初潮教育は以前の教育が大切であるとともに、その時の周囲のうけ入れ方が非常に重要であるので下記のことについて調査をおこなった。調査対象は現在までに初潮のあった93名である。

a 予備知識		b 最初に話した人		c 始まった場所		d 情緒反応	
指導者	人数		人数		人数		人数
先生	49名	母	72名	家	69名	びっくり	57名
先生、母	19	先生	3	学校	20	恥ずかしい	17
先生、友人	3	姉	5	その他	4	安心した	5
先生、母、友人	14	祖母	4	計	93	おそろしい	2
先生、祖父、友人	1	友人	4			ゆううつ	2
先生、おば、友人	1	おば	2			変化なし	7
祖母	1	話さない	3			無記入	3
母	1	計	93			計	93
おば	1						
友人	2						
いいえ	1						
計	93						

a 現在までに初潮のあった93名のうち87名のものが学校教育において初潮以前にそのことについて指導をうけており教師の果している役割は大きい。「いいえ」と答えた1名は、他県より転校してきたものである。そして他の5名についてはおそらく学校で指導を受けていると思うが本人のその時の発育状態やニードの上から家族や友だちの話の方が印象が強かったのではなからうか。

b 初潮のあった時最初に誰に話したか。については圧倒的に母親が多くよこばしいことであ

る。姉と祖母の場合は母の留守中か母のいない家庭のケースである。誰にも話さないと答えたものが3名いるがやはり話しやすい家庭の雰囲気をつくってやる必要があると思う。

c 初潮の始まった場所については家庭が圧倒的に多く69名であったので十分な家族の配慮を望みたい。そして学校で始まったものも20名あったので学校においても生理用品の準備を常時して不安のないように配慮するとともに、その時恥かしい思いをしないですぐに相談のできる教師との人間関係もまた必要なことであると考えらる。

d 情緒反応については上記のごとく暗い反応が圧倒的に多いが、年令的にも早い時期から思春期が開始するようになった現状において、人格形成の十分でない情緒の不安定な時期に初潮のおよぼす影響はかなり大きいものであると考えられるので学校と家庭の協力により安定した状態で明るい情緒反応の得られることを期待したいものである。

4) 月経障害と変調の学業におよぼす影響

月経は生理現象であるが、月経の前、並びに月経時にからだに何らかの変調を感じたり、精神的にも情緒の不安定な状態になりやすいので、このことと学業の関係について現在までに月経のある93名について調べた。そのうち月経の前に別に何の変調もないものが55名で、変調を感じるものは38名であったが全員日常生活には支障のない状態であり、月経時については何の変調も感じないものが30名で、他の63名は何らかの変調を感じるものである。そのうち普通の生活ができるものが59名、セデスなどの薬を使用するものが6名、そして学校に無理して出席するものが1名とそのとき学校を休むものが1名であった。

月経時の学校での勉強のでき具合は下記の通りで、約半数のものが少し能率が低下する程度で別に大きな問題はない。

	人数
ア 普段とかわりなく勉強や運動ができる。	32名
イ 少し能率が下がるように思う。	53名
ウ 体育の時間だけ休む。	8名
エ いねむりをする。	0名
オ 勉強が全然手につかない。	0名
計	93名

次に月経の前やその時にいたみのある場合にどのようにしているかについて調べたが、対象93名のうち12名は何の苦痛も感じないしやわせな人たちであり、他の81名の人は月経の前、並びに月経時にからだに、ここに何らかの変調を感じる人たちであり、症状については第3表に仔細に示す。

第3表 月経の前と年経時の症状

普段	症	状	月経前	月経時	普段	症	状	月経前	月経時
3	ア	下ばらぐたい	33	50	5	サ	めまいがする	5	5
2	イ	下ばらがはる	4	7		シ	のぼせる		2
1	ウ	腰がいたい	2	9	3	ス	いらいらする	5	14
7	エ	頭がいたい	8	11	2	セ	ゆううつ		18
	オ	乳がいたい	4	1	3	ソ	はらがたつ	6	14
	カ	乳がはる	1		2	タ	おちつきがない	3	6
	キ	はきけがする	1	2	3	チ	少のことが気になる	2	13
3	ク	かたがこる	2	6	2	ツ	ねむけがする	3	12
1	ケ	つかれやすい	3	8	8	テ	物ごとにあきやすい	4	12
3	コ	べんぴする	1	4		ト	その他		

肉体的症状としては下腹部痛が圧倒的に多く、次いで頭痛であり、精神的にはゆううつ、はらがたつ、いらいらするなどの情緒の不安定な状態が目だっている。

普段でも第3表にあげている症状のあるものがあり、特に物事にあきやすい、頭がいたい、めまいがするなどの症状をもつものがあり、思春期の健康管理の点も十分に留意し、病的異常の早期発見につとめなければならない問題があり、特に思春期は身長、体重の増加の著しいものほど貧血傾向を示すといわれているので、この点も考慮し、日常生活とともに栄養についても十分配慮が必要である。

5) 思春期の女子の生理についての家族の関心度

現代のように人間像の指標が不明確で、価値体系の混乱している時代には性教育の考え方と与えかたが、いちだんと困難である¹⁾。目的を達成するためには、体験の学習と知識の学習の二つの側面が当然必要である。体験の学習とは出生後の環境や育てられかたによって無意識のうちに身についていく学習であり、家庭の状態によって左右され、特に母親の影響は重大であるので前記対象者の100名の女生徒の家庭について調査をおこなった。

父母の背影については、生徒100名中、父のない家庭は12名であり、母のない家庭は4名であった。

父母の職業の仔細については第1表の通りで、父親の職業は88名のうち、正業のものが86名で、後の2名は内職的なものである。母親は96名のうち職業をもっているものが丁度半数の48名である。

第4表 父 母 の 学 歴

学 歴	旧 大 学 卒	専 門 学 校 卒	旧 制 中 学 卒	旧 制 高 女 卒	青 年 学 校 卒	高 等 小 学 校 卒	小 学 校 卒	新 制 高 校 卒	新 制 中 学 卒	盲 学 校 卒	各 種 学 校 卒	不 在	計
父	4	8	20		2	39	6	3	5	1		12	100
母			30		2	40	10	2	11		1	4	100

次に学歴であるが、父母ともに高等小学校卒業者が圧倒的に多く、約半数に近い人数であり、次いで旧制中学卒業者が約1/4と、旧制女学校卒業者が約1/3であり、教育背影についても、ごく普通の水準である。

第5表 父 母 の 年 令

年 令	31~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	不 在	計
父	4	16	46	15	5	2	12	100
母	13	37	33	11	0	2	4	100

父母の年令については31才~36才までの広い幅があるが、36才~43才までの父母が最も多く、次いで46才~50才までとなっている。

これらの年代の父母たちは、戦時中、若しくは戦後の混乱した時代に教育を受けたものが多く、この年代の母たちは月経は恥ずかしいもの、不浄なものと思い人に知られぬよう始末する習慣を身につけ、女の厄とか宿命のように考えてきた人が多かった。そして初潮の年令についても現在、母親たちの少女時代よりも早くなっているので時期を失せず明るく正しい指導のできる母親になってもらいたい。

次に子供の生理についての関心度であるが、母親が自分の子供の生理に関心をもち暖かい家庭の雰囲気の中で親より性教育のうけられる子女は幸であらう。家庭においてその責任を果たすことが望ましいが、現在ではすべての家庭に期待することは困難であるが、せめて自分の子供の生理につい

て関心をもってもらいたいものである。

初潮について発来前に子供より相談を受けたことのあるものが44名で、後の56名は相談を受けていない。そして初潮の前に家庭で初潮について話をしたものが60名で、話をしなかったものが37名、無記入が3名であり、月経の発来している93名の約3%のものは何らかの形で母親や、その他の家族の指導を受けていて望ましいことであったが、奇異に感じたのは話をしていない母親のなかに旧制高女卒業の37～49才の母親たちが比較的多いことであり、これは母親たちが思春期に受けた性に対する倫理的な概念からくる結果であろうか。

次に「その話をだれがしたか」については、母が51名、母と姉が5名、母と祖母が2名、姉が1名、祖母が1名であり、やはり母親の数が圧倒的に多くよろこばしいことである。

初潮前に家庭で話をしなかった37名の理由は下記の通りである。

ア	まだ小さいのでその必要がない。	7名
イ	自然にわかるから必要はない。	12名
ウ	話し合える適当な機会がない。	2名
エ	いそがしいので時間がない。	2名
オ	子供が恥かしい思いをするから。	1名
カ	子供に対して話をする勇気がない。	0名
キ	性教育をする能力が十分でない。	1名
ク	学校でしてもらうのがよい。	15名
ケ	その他	0名
計	(注3名項目に重複あり)	40名

上記の家庭で話さなかった理由については項目クが15名で最も多く、次で項目イが12名であり、そして項目アが7名である。これらはいずれも子供の思春期に対する無関心さの表われであり、約1/3のこのような無責任な母親のあることは残念なことであり、母親が自分の子供の生理に関心を持つよう今後学校と家庭の連携により問題を解決したいものである。

その後の生理についても相談を受ける母親は40名であり、後の53名のものは別に相談を受けていない。

月経時の世話(気をつける)については、いつもする母親が20名、本人まかせが45名、具合のわるい時だけするものが28名であった。過保護になることは問題であるが、また一方生徒の母親たちは約半数の48名が職業婦人であり多忙であると思うが、健全な母性の育成の面から母親の暖かい子女に対する関心を期待したいものである。

最後に「思春期の正しい性教育はどこでした方がよいと思うか」の問いに対しては、家庭と学校が56名、学校が30名、家庭が4名、家庭と保健所が1名、学校と保健所が2名であり、月経の発来している子女をもつ93名の回答であるが多くの母親たちも望んでいるように、性教育の特殊性より家庭と学校の連携のもとにおこなわれることが最も望ましいが、学校に依存している家庭が約1/3もあり、知識の学習については系統的に学校でおこなうが、現段階で家庭で指導のできない母親たちはPTAや成人学級、そして母親学級などに積極的に出席して学習をする姿勢がほしいものである。また地域においても保健所が中心となり、市町村が母親たちのための講習会を開き教育を推進してゆきたいものである。学校に指導の適任者のいないような場合は実際は行なわれているが、校医や保健婦、助産婦などの保健医療従事者の協力を求めることも母性保健教育を推進するための方法であると考えらる。

(2) 高知県の小中学校における初潮教育の現状

思春期の母性保健教育は単に通り一べんの知識を与えればすむというのではなく、人間のパーソナリティーの核心に迫るものでなければならない。それで生徒の発達過程より考えて二つの側面

の学習が必要であろう。その一つは体験の学習であり、他の一つは知識の学習である。系統的には学校においては校医、養護教諭、保健主事などによって教育されるが、家庭との密接な連携が必要である。

特に初潮教育については近年児童、生徒の成熟加速現象が問題になっており、初潮年齢もしいに若年化する傾向にあるので、その指導の時期を十分に検討するとともに、進め方内容などについても研究を進める必要があろう。単に生物学的面だけでなく、社会科学、心理学、倫理学なども含めた広い角度と基盤に立って総合的なアプローチを必要とするものであり、その成果を判定することは量的にできても質的に困難なことであるが現状を知るために高知県下の小中学校で質問紙法による調査をおこなった。

調査対象校

	高知市 (市街地)	土佐市 (平地農村)	池川, 上八川, 大崎 東津野, 橋原 (山間地)	計
小学校	17校	8校	7校	32校
中学校	10校	3校	5校	18校
計	27校	11校	12校	50校

1) 養護教諭の配置と初潮教育の担当者

養護教諭が学校保健教育推進の中心的役割を果たしていることは言をまたないが、現状においては農山漁村の小規模の学校には養護教諭の配置されているところは非常に少なく、このような学校においてその役割を誰が、どのように果たしているかが問題であると思われるので今回は初潮教育に焦点をあてて調査をこころみることにした。

第6表 養護教諭の配置と初潮教育の担当者

学 校 別	地 域 別	養 護 教 諭 有	〃 無	養 護 教 諭	女 先 生	保 健 主 事	家 庭 科 の 先 生	養 護 教 諭 担 任	養 護 女 先 生	養 護 体 育 の 先 生	家 庭 科 の 先 生	保 健 科 の 先 生	体 育 の 先 生	養 護 教 諭 医	し て い な い
小 学 校	高知市	17		12				2	1		1			1	
	土佐市	2	6		4	1	2	1							
	山間地	2	5	2	2	2	1								
中 学 校	高知市	7	3	1		2			1	2			1		3
	土佐市	1	2		1							1	1		
	山間地	1	4	1		1	2								1
合 計		30	20	16	7	6	5	3	2	2	1	1	2	1	4

調査結果については第6表の通りであり、50校中、養護教諭の配置されている学校は小中合わせて30校であり、配置されていない学校は20校である。仔細には調査対象の高知市内の小学校17校には全校に配置されており、中学校は10校中7校に配置されており問題は少ないが、土佐市では高岡第一小、宇佐小、高岡中と比較的大きい規模の3校のみに配置され、山間地では大崎小、上八川小、池川中の3校であり、農山村の小中学校に配置されている数は非常に少ない現状である。

養護教諭のおかれている学校では初潮教育についても、校医や保健主事、そして女先生の協力を得て養護教諭が主体的役割を果たしている学校が圧倒的に多く、養護教諭のいない学校においては保健主事や女先生の果す役割は大きい。

性教育の基盤については医学、生物学、心理学、社会学、倫理学などの分野において考えられるが、初潮教育の内容については生理学の知識を必要とすることがらきわめて多く、小学校では校医と養護教諭などの保健関係者が担当し、中学校においては教科内容からみても保健の教科の中で取り扱うことが妥当であろう。しかし実際には学校によってはごく限られた時間に一部の人で進めなければならない場合もあり、各校様々であると思われる。

小学校においては調査32校全部が何らかの形で初潮教育を実施しているが、中学校においては時間がない、適任者がいないなどの理由で実施していない学校が4校あったが、小学校の教育のみにおわることなく児童、生徒の発達段階と必要度に応じて段階をおった継続指導の必要性を痛感するものである。

2) 小中学校における初潮教育の実施の時期

初潮教育は女子の性教育の中で比較的熱心の実施されているが、近年特に思春期の女子の身体的発育が向上し、成熟加速現象が問題になっており、初潮年令も前傾しているのでその進度に合せて初潮教育の時期を的確につかみ指導をしなければならない。

第7表 初潮教育の実施の時期

学校別	学年	一学期		二学期		三学期		計		備考	
		高知市	その他	高知市	その他	高知市	その他	高知市	その他	高知市	その他
小学校	4						1		1	個人的指導2校	
	5	13	2	2	6	1	2	16	10	5年のみ3校	5年のみ4校
	6	13	7	1	4			14	11	6年のみ1校	6年のみ4校
中学校	1	5	6	1				6	6	1年のみ2校	
	2		1	7				7	1	2年のみ3校	2年のみ1校
	3	1	1					1	1	{この1校は1.2.3.年実施	{この1校は1.3年実施

初潮教育の実施の時期は第7表の通りで、小学校においては5年生の一学期、6年生の二学期と継続して実施している学校が圧倒的に多く、それ以前に必要なと思われる児童については個人指導をおこなっている学校が2校あった。思春期の身体的発育は一般的に非常に旺盛であるが、また個人差も大きいので集団指導とともに個人指導も重要である。

中学校においては1年生の一学期、2年生の二学期に指導をしている学校が多く、望ましいことであるが、小中学校ともに一部には一度の指導のみにおわっている学校もあった。

現在の実施の時期が適当であるかどうかについては、小学では「適当である」と答えた学校が26校で「いいえ」と答えた学校が6校であり、これらの学校は5年若しくは6年で一度だけ指導をしている学校であった。

中学校では実施していない4校をのぞいては14校とも「適当である」と答えている。

昨年筆者が高知女子大学紀要自然科学編第16巻、初潮と月経に関する研究(その1)で報告した初潮年令は10才～16才と差が大きく、多くのものが12才～13才にかけて初潮をみており、平均年令は13才2か月であった⁹⁾。本調査においても前述のごとくほぼ同じ結果である。このように思春期は学年差と個人差の非常に大きい時期であるので、学校において集団指導計画を立案する場合は発達段階に応じて理解度とニーズにあわせた計画をして重要な項目については毎年内容を高めながらくりかえし指導をすることが必要である。

3) 初潮教育の実施計画と内容

集団指導計画の立案にあたっては思春期の特徴を十分に考慮し、他の教育計画と同様に年度当初に計画され、実施されなければならない。そして内容的にも従来ややもすると、生理学を教えるだ

けに終わった傾向がないりわけではなかったが、人間的側面も加えた総合教育を望みたいものである。

第8表 初潮教育の実施の時間

実施時間	学校別 地域別	小 学 校			中 学 校		
		高 知 市	そ の 他	計	高 知 市	そ の 他	計
年度当初に計画した時間		2	1	3	1		1
その時特別に考える		11	12	23	4	1	5
保 健 の 時 間					3	1	4
体 育 の 時 間		2		2	2	2	4
家 庭 科 の 時 間			1	1		3	3
そ の 他		1	2	3	2	1	3

※注 中学校は2校二種類の時間を使用している学校があるためトータルが多い

しかし実際には第8表のごとく初潮教育が他の教育計画とともに年度当初に計画されている学校は非常に少なく、小中学校合わせて4校にすぎず、その時特別に考えると答えた学校が大多数であったが、小学校においては年度の学校保健計画の中に必ず年度当初に計画し、中学校においては思春期の性教育の一環として保健の教科の中で教育し、また一方学校保健計画の中にも修学旅行前や卒業期を控えての指導が必要であると考ええる。

次にそのための年間に使用する時間であるが、小中学校ともに1時間～2時間の学校が多く、1時間と2時間の比はほとんど大差なく、その他に3時間が3校、4時間が中学校に1校あった。時間のことは教育内容とも合わせて考慮しなければならない問題である。

そこで初潮教育の集団指導を行なう場合、目的、内容、範囲をどう考えるかが問題であるが従来ややもすると月経時の手当の方法を指導するのみに終わっていた学校もあると思うが、それでは児童に与える影響はかなり大きいと思われるので児童、生徒の発達段階に応じて項目を撰定することが必要であり、特に小学校5年生の一学期の指導などは、まだ初潮の発来していない児童も多いので、ごく身じかな自分たちの成長してきた過程をふり返り、そして現在の自分たちのからだはどのように発育しているか、そして男女のからだや役割のちがいなど平易な項目から自然に本論に導入する必要があると考える。

そして集団指導では早熟者、晩熟者により理解度がことなるので重要な項目は毎年内容を高め重複させて指導する必要がある、特に大切なことは初潮を不安や暗い気持ちで迎えることなく女性として生れたことによるこびと誇りをもたせるような指導を望みたい。

第9表 指 導 項 目

項 目	学校別 地域別	小 学 校		中 学 校		項 目	学校別 地域別	小 学 校		中 学 校	
		高知市	その他	高知市	その他			高知市	その他	高知市	その他
イ おとなへの階段		12	6	3	4	ト 母になるために		14	5	4	4
ロ 男女のちがい		13	5	5	6	チ 月経について		13	10	7	5
ハ 女性のからだ		13	7	5	7	リ 月 経 周 期		12	9	4	6
ニ ホ ル モ ン				1	3	ヌ 生 理 用 品		14	11	5	6
ホ 初潮について		15	13	4	4	ル 月経時の生活		13	10	6	6
ヘ 初潮の手当		13	14	4	6						

指導項目については第9表の通りであり、高知市内の小学校においては、調査対象校17校中、12校の約70%の学校がホルモン以外の項目について全部指導をしており、その他の学校においても初潮のことのみでなく多くの項目について指導され、特に「母になるために」については14校が指導を

しており、母性保健の見地より非常に望ましい状態であった。

高知市以外の小学校においてはホルモン以外のほとんどの項目について指導している学校は15校のうち1/5の5校であった。そして問題は第9表に示すごとく、初潮と月経に直接関係のあるものの数が他の項目に比較して高いことである。これは養護教諭が配置されておらず、他の教員にそのために負担が寄せられていることが考えられやむをえないことだと思うが、教育効果の観点から指導項目を検討されることが望ましいことではなかろうか。

中学校については高知市とその他の学校の大差はほとんど認められないが、特に内分泌腺のはたらきについて指導している学校が非常に少なく、ホルモンについて完全に理解させることは困難なことであるかもしれないが、中学2年生の段階では内分泌腺の生理、解剖について理解させ、第2次性徴とホルモンの関係および個人差について理解させることが必要であろう。このような生理学や医学面の指導などについては校医の援助を受けることも一つの方法ではなかろうか。

教材については第10表の通りであるが、小学校においてはスライドと実物（生理用品）の使用が圧倒的に多く、中学校においては高知市内は掛図の使用が多く、その他の中学校ではテキストを使用している学校が多い。よりゆたかな内容の教育を期待するなれば教材研究もまた必要であろう。

4) 初潮教育の家庭との連携について
思春期は子供から大人への移行期という特殊な時期であり、早く独立した

い、大人になりたいと背伸びするとともに、いつまでも子供でいたい、母親に依存したいと願う時期でもあり、この相反する欲求が交錯し、共存して不安定な状態にあり、まだ母親の庇護のもとにあるということからも児童、生徒自身と母親の両者に対して平行して指導を行なう必要があり、学校と家庭の密接な連携が重要であると考ええる。

そこで「母親に対して初潮教育についての話し合いの機会をもっていますか」の問いに対して「もっている」と答えた小学校は高知市内が5校、その他が2校で、中学校は高知市内が3校、その他が1校で小中合わせて11校で全体の約1/5であった。

次に「家庭に対して初潮教育に関する文書連絡をしていますか」の問いに対して「している」と答えた小学校は高知市内3校、その他が5校、中学校は高知市内が3校、その他が1校で小中学校合わせて12校であった。

家庭との連携についてはいずれも調査対象の約1/5であり、積極的にPTAなどの機会を活用し母親との連携を母性保健の立場より望むとともに、思春期の日常生活についても十分に配慮し、健全な母性意識を育てることが重要であると考ええる。

5. お わ り に

以上、初潮教育を中心とした調査をおこなったが、高知県の小中学校の対象校の選定にあたり、統計的に評価のできるように配慮して調査用紙を依頼したが、結果的にはアンバランスの状態となり、正しい評価は得られず残念であった。しかし協力の得られた小中学校の多くは熱心な指導がおこなわれており、敬服する次第である。なお一層の効果を期待するためには家庭との連携のもとに教育が進められることを望みたい。

第10表 教 材

項 目	学校別		中 学 校	
	地域別	小 学 校	高知市	その他
イ テ キ ス ト		3	2	1
ロ 模 型				2
ハ ス ラ イ ド		13	8	2
ニ 掛 図			3	7
ホ テープレコーダー		2		1
ヘ 実物（生理帯など）		12	10	5
ト そ の 他			2	2

母性保健に携わるわれわれの今後の課題としては新しい看護教育のカリキュラムの中で母性看護の活動分野を学生に十分に認識させ、学校保健との関連において母性機能のはじまる思春期、あるいはそれ以前の段階が本当によい母性を決定する時期であることの重要性を十分に把握して、看護者（養護教諭を含む）の育成につとめるとともに、他のこの年齢層の子女を取扱う集団指導者と、どのように協力をしてゆけばよいか、また積極的に学校教育、社会教育、行政の面などについても働きかけ、組織的に取り組んでいく姿勢が必要であると考えます。

参 考 文 献

- 1 林路 彰, 山下: 母性保健 P14, 医学書院
- 2 松本清一: 母性看護 P99, 医学書院
- 3 森田道子: 初潮と月経に関する研究（その1）高知女子大学紀要自然科学編第16巻

（高知女子大学 衛生看護学研究室）